

分担研究報告書

機能的アセスメントをベースにした対面研修の効果について

研究協力者 近藤鮎子（株式会社エルチェ）
研究協力者 竹矢恒（一般社団法人 あんぷ）
主任研究者 井上雅彦（鳥取大学医学系研究科）

要旨

いわゆる強度行動障害は、学齢期から重篤化し成人期まで継続することが指摘されており、機能的行動アセスメントに基づくアプローチと薬物療法を含む長期的な治療を必要とすることが多い。機能的アセスメントは、本人視点から環境との相互作用中で行動問題の原因や背景を理解し、効果的な支援を実現するために必要不可欠な評価である。本報告では機能的アセスメントを中核にした強度行動障害の基礎・実践研修後の応用研修として実施した 2024 年度 東京都社会福祉協議会における「強度行動障害アドバンス研修」の効果を検討した。これに基づき、機能的アセスメントによる知識や技術をどのように活用すべきか考察する。

A. 研究目的

行動障害に対する心理社会的アプローチに関する多くの研究が、行動分析学をベースにした「機能に基づくアプローチ」を最も有効なものであることを示している（Horner ら,2002）。機能に基づくアプローチとは、行動問題を引き起こしている先行事象とその行動を維持している強化子を特定することで、“なぜその人がその行動をするのか”を理解し、その行動を引き起こしている先行事象を変更し（環境調整）行動を生じにくくするとともに、課題行動の代わりとなる望ましい行動（コミュニケーションや余暇活動、課題従事行動など）を教えるいくアプローチである。

我が国の支援手法としては、障害特性のアセスメントから環境調整まで、支援手順書を活用した統一的な支援を「標準的支援」としていたが、2023 年の「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」の報告書においては「強度行動障害を有する者への支援においては、障害特性を正しく理解し、機能的なアセスメントを行う等の根拠のある・標準的な支援を行うことを基本」とすることが明記された。

本報告では機能的アセスメントを基礎とした強度行動障害の応用研修として 10 年以上にわたって実施してきた東京都社会福祉協議会において 2024 年度に実施された「強度行動障害アドバンス研修」の概要と

その効果について検討する。

B 研究方法

1. 参加者・対象者

参加者は、国内で強度行動障害のある利用者を担当する施設の支援員で、通所・入所は問われなかった。参加者の平均年齢は37.9歳（うち男性17名、女性4名）であった。障害のある利用者の支援に携わった経験年数は、平均して10.1年であった（表1）。

表1 2024年度 東京都アドバンス研修の参加者・対象者

参加者	平均年齢（下限-上限）	37.9 (24-60)
(N=21)	経験年数（下限-上限）	10.1 (4-20)
	性別	男性17名/女性4名
対象者	平均年齢（下限-上限）	31.9 (19-53)
(N=21)	性別	男性17名/女性4名

参加者は自分の担当する強度行動障害のある利用者を1名、今回の研修の演習で取り上げる対象者として選定した。対象者の平均年齢は31.9歳（うち男性17名、女性4名）であった。

対象者の所持する療育手帳の度数は、2度が18名で最も多かった。障害程度区分は、区分6に該当する人が最も多かった。知的障害の程度は、重度である人が最も多かった。主な診断は、自閉スペクトラム症（ASD）が17名と最も多く、てんかん10名が続いた。注意欠如・多動症（ADHD）、や統合失調症の診断を持つ人もいた。また、主な診断がついていない人もいた（表2）。

表2 各対象者の療育手帳・障害程度区分・知的障害の程度・主な診断名

		人数
療育手帳	1度	1
	2度	18
	3度	1
	4度	1
障害程度区分	非該当	1
	区分4	3
	区分5	6
知的障害の程度	区分6	11
	不明	5
	軽度	1
	中度	2
主な診断名	重度	13
	ASD	17
	てんかん	10
	ADHD	3
有断名	統合失調症	1
	なし	1

2. スケジュール・内容

今回実施した東京都のアドバンス研修は1回2時間で、全6回の連続研修であった。6回目は事例発表会（事業所の責任者も参加）として、参加者は対象者の行動改善を発表した。また、開始に先立って参加者が所属する事業所の責任者の同席のもとプレセミナーを行い、研修目的についての説明や、利用するSNSとしてSlackの使い方や、行動記録に利用するアプリの使い方の説明を行った。

研修のセッティングは図1のような形式で参加者3-4名を一つのグループとして、それぞれにグループリーダー（強度行動障害の十分な実践経験を有し、アドバンス研修を修了した者）とサブリーダーを配置した。複数グループには応用行動分析の専門家がインストラクターとして参加した。

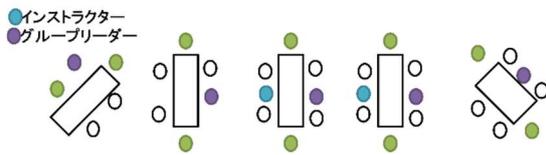


図1 グループの構成

研修の各回は講義と演習で構成された。

講義内容は以下のとおりであった。

- ① 標的行動の選択と具体化
- ② 行動の機能的アセスメント
- ③ 先行条件への介入（環境調整）
- ④ 代替行動の支援
- ⑤ 代替行動の強化とCBの消去
- ⑥ クールダウンの方法

参加者は自分の選定した対象者について、これらの講義内容をもとに対象となる問題行動の機能を推定し、ストラテジーシートに従って支援計画を作成する演習を行った。研修終了後、参加者は各現場において実際の対象者の行動を記録し、現場の他の担当者と共に支援計画を作成して実践した。次の回の研修で、実践した結果としての行動記録を持ち寄り、結果についてグループ内でディスカッションを行うという流れを各回で繰り返した（図1）。

ICTの活用として、研修講座用のHPを開設し、参加者は自分の事業所のスタッフに研修会の内容を伝達研修する場合に活用できるミニ講座を利用できた。

各回は約1か月の間隔があり、その間参加者は事業所に持ち帰って実践を行った。研修と研修の間の実践期間における進捗の

報告やリーダーやインストラクターからのアドバイスを行うツールとしてSlackを使用した。また行動観察などの記録はアプリケーションもしくは紙による記録用紙を利用した。

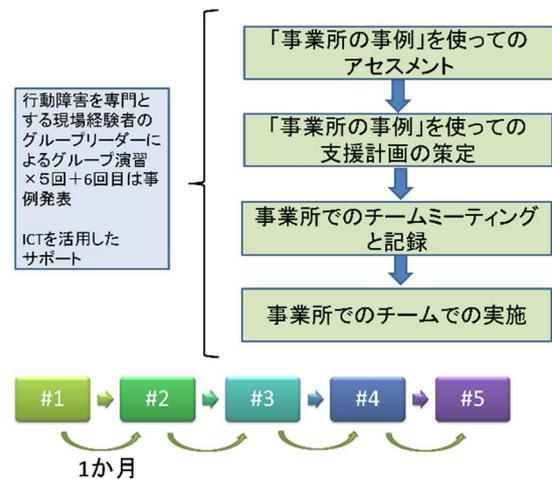


図1 東京都アドバンス研修の流れ

C 結果

参加者の事業所におけるミーティングや記録実施に関するアンケート結果

アドバンス研修においては、参加者が自分自身の事業所内で現場の担当者に研修の内容を伝え、実践に繋げることを肝としている。各研修回の冒頭で行うアンケートでは、研修の後に参加者が自分の事業所でミーティングを実施することができたか、記録を行うことの意義や方法、重要性について説明することができたかについて質問し、参加者の回答を得た（表3）。

研修の後、自分の事業所においてミーティングを行えたかどうかの質問に対しては、おおむね85～95%の参加者が1回以上実施できたと回答した。また、行動記録についての説明を行うことができたかについては、おおむね85～95%の参加者が

「できた」または「すこしできた」と回答した。

表3 研修の後、参加者が事業所でミーティングを行うことができたか・記録についての説明ができたか（アンケート回答）

研修回数	回答	前回の研修後、ミーティングを行えたか		行動記録の周知について記録をとる意味を説明できたか		
		1回以上実施した	実施できなかった	できた・すこしできた	どちらともいえない	できなかった・あまりできなかった
1回目	N=20	17 85%	3 15%	17 85%	2 10%	1 5%
2回目	N=20	19 95%	1 5%	19 95%	1 5%	0 0%
3回目	N=20	17 85%	3 15%	18 90%	1 5%	1 5%
4回目	N=20	19 95%	1 5%	18 90%	2 10%	0 0%

2回目と3回目の研修冒頭のアンケートでは、自分の事業所において行ったABC行動観察記録の結果を関係する職員と共有することができたか、という質問の回答を求めた。2回目の研修時に「できた」「すこしできた」と回答した参加者が40%だったのに対し、3回目の研修時には、75%と増加した（表4）。

また、2回目～4回目の研修冒頭のアンケートでは、自分の事業所において行ったスキッタープロット記録の結果を共有することができたか、という質問の回答を合わせて求めた。2回目の研修時に「できた」「すこしできた」と回答した参加者が65%だったのに対し、3回目の研修時には、75%、4回目の研修時には80%と増加した（表5）。

表4 参加者が、自分の事業所の職員に対してABC行動記録の結果を共有できたか（アンケート回答）

研修回数	回答数	ABC行動記録シートの結果は職場で共有できましたか？		
		できた	どちらともいえない	できなかった・あまりできなかった
1回目	項目なし		なし	
2回目	N=20	8 40%	6 30%	6 30%
3回目	N=20	15 75%	3 15%	2 10%
4回目	N=20		なし	

表5 参加者が、各事業所の職員に対してスキッタープロットの結果を共有できたか（アンケート回答）

研修回数	回答数	スキッタープロットの結果は職場で共有できましたか？		
		できた・すこしできた	どちらともいえない	できなかった・あまりできなかった
1回目	項目なし		なし	
2回目	N=20	13 65%	4 20%	3 15%
3回目	N=20	15 75%	4 20%	1 5%
4回目	N=20	16 80%	1 5%	3 15%

参加者の支援知識について研修前後比較

連続研修の事前（Pre）と事後（Post）で、参加者の行動の機能を推定する際の下となる、行動変容法に対する知識の変化として Knowledge of Behavioral Principle as Applied to Children (KB PAC ; O'Dellら 1979)の短縮版を用いて検討した。参加者の強度行動障害の支援を行った経験年数を、10年未満の群（未満群：n=11）と10年以上の群（以上群：n=10）に分けてウィルコクソンの符号付順位和検定を行い検討を行った結果、各群と共に Post で有意

にスコアが上昇した（表 6）。

表 6 参加者の機能分析に関する知識テスト（KBPA）の結果

	Pre	Post	P値	
経験10年未満 の参加者 (n=11)	10.4 (5-14)	13.5 (9-21)	0.021	p<.05*
経験10年以上 の参加者 (n=10)	14.6 (8-23)	17.3 (12-24)	0.001	p<.01**
参加者全体 (N=21)	12.4	15.3	0.000	p<.001***

対象者の行動指標について研修前後比較

強度行動障害のある対象者の行動についてはABC-J（異常行動チェックリスト日本版）、BPI-S（問題行動調査票短縮版）、強度行動障害判定基準表（旧法）のPreとPostの変化を測定し、対象者の支援を担当している参加者の経験年数を基に、10年未満の群（未満群）と10年以上の群（以上群）に分けてウィルコクソンの符号付順位和検定を行い、研修効果の検討を行った。

ABC-Jのスコアにおいては、「不適切な言語」の項目を除く全てのスコアが、Postにおいて有意に減少した、もしくは有意に減少する傾向がみられた（表7）。BPI-Sのスコアにおいては、「攻撃的・破壊的行動（頻度）」と「常同行動（頻度）」と全体の合計値において、スコアがPostで有意に減少した（表8）また、強度行動障害判定基準表（旧法）のスコアにおいても、以上群と全体の合計値において、スコアがPostで有意に減少した。

D 考察

機能的アセスメントをその中核にした強度行動障害の応用研修として、2024年度東京都社会福祉協議会 強度行動障害アドバンス研修の参加者の担当する対象者はABC-JやBPI-S、強度行動障害判定基準表（旧法）の平均得点からも、行動障害の状態にあったと考えられる。特に、支援経験が10年以上である参加者が選定した対象者の平均値は10年未満の参加者に比べて高いスコアであったことから、経験年数が長い職員が、より重篤な行動障害を抱える利用者の対応を任される可能性が高いことが示唆された。

今回の連続研修の事前事後では、全ての参加者の行動変容に関する知識が向上した。また、対象者に対する書く行動指標（ABC-J、BPI-S、強度行動障害判定基準表）のスコアの変化からは、10年以上の支援経験のある参加者が選定した対象者の群では行動がより大きく改善したことも示唆された。しかし一方で、支援経験が10年未満の参加者が選定した対象者の群では、行動指標には有意な改善はみられなかった。このことから、今回行った月に1回、全6回のグループ研修の枠組みに加え、これまでの支援の経験に基づいた現場での実践が効果を高めた可能性が考えられる。また、本研究においては自分自身の事業所のメンバーに対してミーティングを開催し、記録をつたり支援計画を作る際の取り仕切りを行うことが求められていた。そのため、支援の知識や技術だけではなく、現場における参加者自身の権限や、スタッフ間のコミュニケーションにおいて、支援

経験が少ない参加者にとっては利用できるリソースが少なかった可能性が考えられる。

今回、支援の経験年数によって研修の効果に大きく差が見られた。数名の参加者1グループに対してリーダーやインストラクターを複数名配置して行うという研修の特性上、研修1回あたりの参加者の数は限られるという制約がある。強度行動障害のある利用者の行動を大きな改善につなげることができる連続研修のパッケージでは、より持続的で大きな効果を出すための要因を明らかにすることが強く望まれている。経験年数によって研修効果に差がみられた今回の結果を受け、どのような対象者に対してどのような内容の研修が少ない資源の中でより大きな成果を得ることができるのかを再考する必要がある。研修がパッケージ化されているために機能的アセスメントの単独効果が実践結果にどのように影響しているかは明確でないが、今後参加者や対象者の属性について考慮に入れながら、同様の研修を開催し、成果を比較することで詳細な分析に繋げることができると思う。

E 引用文献

Horner, R. H., Carr, E. G., Strain, P. S., Todd, A. W. and Reed, H. K. (2002) Problem Behavior Interventions for Young Children with Autism : A Research Synthesis . Journal of

Autism and Developmental Disorders 32 (5) 423-446.

厚生労働省（2023）強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書
<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/001080076.pdf>（2023年9月20日参照）

F 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

Inoue, M. (2024). Long-Term Outcomes for a Student with Severely Challenging Behavior in a Special Needs School for Intellectual Disabilities: A School Consultation Case Study. *Yonago Acta Medica*.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

表7 対象者の日本語版異常行動チェックリスト（ABC-J）のスコア

		Pre	Post	P値	
興奮性	未満群(n=11)	12.1 (0-39)	9.7 (0-25)	0.284	
	以上群(n=10)	12.8 (3-27)	8.5 (2-33)	0.075	p<.1+
	全体(N=21)	12.4 (0-39)	9.1 (6-100)	0.053	p<.1+
無気力	未満群(n=11)	7.5 (0-22)	7.5 (0-22)	0.398	
	以上群(n=10)	7.5 (0-22)	3.8 (0-13)	0.050	P<.05*
	全体(N=21)	7.5 (0-22)	3.8 (0-22)	0.369	
常同行動	未満群(n=11)	4.4 (0-13)	5.3 (0-11)	0.327	
	以上群(n=10)	5.7 (0-16)	3.6 (0-16)	0.065	p<.1+
	全体(N=21)	5.7(0-16)	3.6 (0-16)	0.491	
多動	未満群(n=11)	9.2 (0-38)	8.5 (2-17)	0.878	
	以上群(n=10)	10.9 (2-35)	6.6 (0-36)	0.015	P<.05*
	全体(N=21)	10.9 (0-38)	6.6 (0-36)	0.135	
不適切な 言語	未満群(n=11)	2.0 (0-5)	3.0 (0-6)	0.196	
	以上群(n=10)	3.5 (0-8)	2.6 (0-8)	0.184	
	全体(N=21)	3.5 (0-8)	2.6 (0-8)	0.886	
合計	未満群(n=11)	35.1 (4-112)	34.0 (8-69)	0.831	
	以上群(n=10)	40.5 (12-82)	25.1 (6-100)	0.027	p<.05*
	全体(N=21)	37.7 (4-112)	29.8 (6-100)	0.082	p<.1+

表 8 対象者の BPI-S と判定基準法（旧法）のスコア

		Pre	Post	P値		
BPI-S	自傷行動 (頻度)	未満群(n=11)	2.2 (0-9)	2.9 (0-12)	1.000	
		以上群(n=10)	4.1 (0-11)	3.0 (0-11)	0.206	
		全体(N=21)	3.1 (0-11)	3.0(0-12)	0.477	
	攻撃的・ 破壊的行動 (頻度)	未満群(n=11)	5.7 (1-20)	4.0 (0-12)	0.283	
		以上群(n=10)	5.9 (1-15)	2.7 (0-11)	0.006	p<.01**
		全体(N=21)	5.8 (1-20)	3.4 (0-12)	0.019	p<.05*
	常同行動 (頻度)	未満群(n=11)	12.9 (6-24)	14.5 (3-26)	0.357	
		以上群(n=10)	20.3 (0-47)	12.9 (2-38)	0.010	p<.01**
		全体(N=21)	16.4 (0-47)	13.8 (2-38)	0.217	
	合計	未満群(n=11)	20.8 (9-42)	21.5 (3-37)	0.831	
		以上群(n=10)	30.3 (5-58)	18.6 (6-46)	0.014	p<.05*
		全体(N=21)	25.3 (5-58)	20.1 (3-46)	0.128	
	判定基準表	未満群(n=11)	7.4 (0-24)	6.3 (0-19)	0.443	
		以上群(n=10)	11.4 (3-29)	7.3 (0-23)	0.027	p<.05*
		全体(N=21)	9.3 (0-29)	6.8 (0-23)	0.041	p<.05*